ふくいじょうあと
福井城跡

やまざとぐちごもん
山里口御門

現地説明会資料

平成25年8月31日（土）

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井城跡山里口御門（Ｂ区）

調査の概要

山里口御門の構造に関する遺構を検出し、復元に向けた資料を得るため調査を実施しました。

山里口御門は、本丸への入口の門として創建当時（1606 年）から造られ、方向の異なる櫓門（やぐらもん）と高麗門（こうらいもん）によって枡形が形成されています。

今回、本丸側の櫓門北半と内堀側の高麗門にあたる範囲を調査しました。調査の結果、櫓門北半を中心に、門の規模や基礎の構造に関する遺構を検出しました。

遺構

櫓門北半では、北側と東側で石列を２条検出しました。石列１の北東端は大形の平石ですが、主に方形状の切石が用いられています。南側と西側の石垣上面では、浅い溝状の段を数箇所検出しました。土台となる横材を据えるため作出されたと考えられます。石列と石垣が基礎となり、土台として横材を周りにめぐらせて柱を建てる、土台建ての構造であったと推察されます。また、北側石垣面で柱受けを５箇所検出しました。高さ約 1.4mで幅 0.3m程を測り、1.4m程の等間隔に列をなして並んでいます。櫓門北半は、梁間４間で東西約 5.6mの規模であったと考えられます。

櫓門北半の東側では、雁木（がんぎ）を検出しました。長さ約 1.0mで幅 0.3m程の延石（のべいし）が用いられ、９段程の階段状に構築されています。雁木の裏込めには現代の客土が堆積しており、下３段より上部は積み直されたと考えられます。

高麗門にあたる範囲は、現代の撹乱により門が構築された当時の面は遺存していない状況でした。櫓門北半の西側石垣面と内堀側の小石垣面で柱受けを２箇所検出しました。高さ約 1.8mで幅 0.3m程を測り、柱受け間の幅は、底部中央で約 4.8mとなります。

他に、櫓門北半の西側石垣裾で石製の暗渠（あんきょ）を検出しました。長方形の板石を断面がコの字状に組んで構築されており、Ａ区暗渠２の続きと考えられます。高麗門の下位に埋設され、北方の内堀へ排水されていたと考えられます。

遺物

コンテナバットで約３箱分出土しました。主に笏谷石製の丸瓦や平瓦などで、他に近世から近代の土器や陶磁器片が僅かに出土しました。

まとめ

高麗門にあたる範囲は、遺存状況があまり良好ではありませんでしたが、櫓門北半を中心に石列や柱受けなど、門の規模や基礎の構造に関連する遺構を検出しました。Ａ区の調査成果と合わせ、山里口御門の復元に向けた資料が得られたと考えられます。

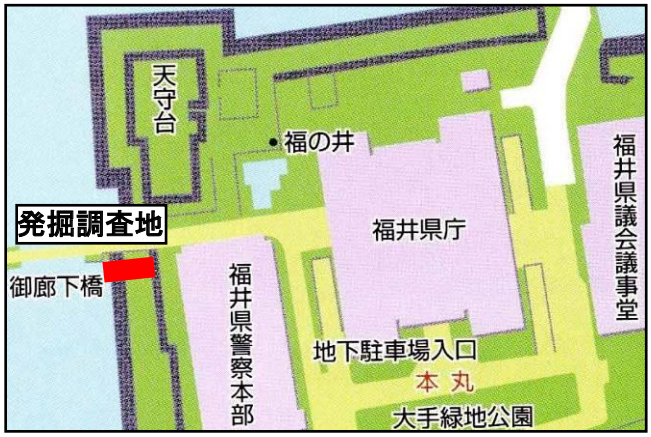

図１　調査区位置図

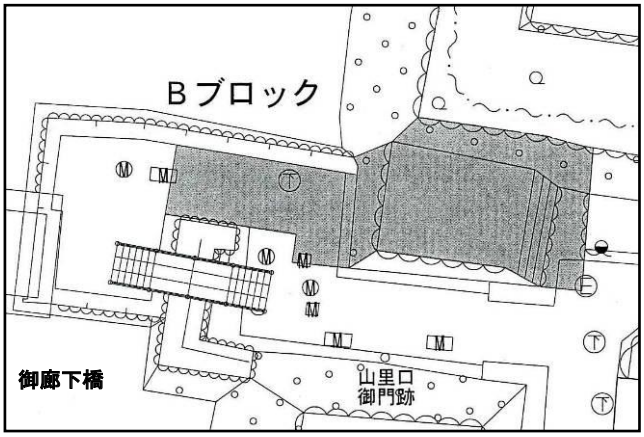

図２　調査範囲図

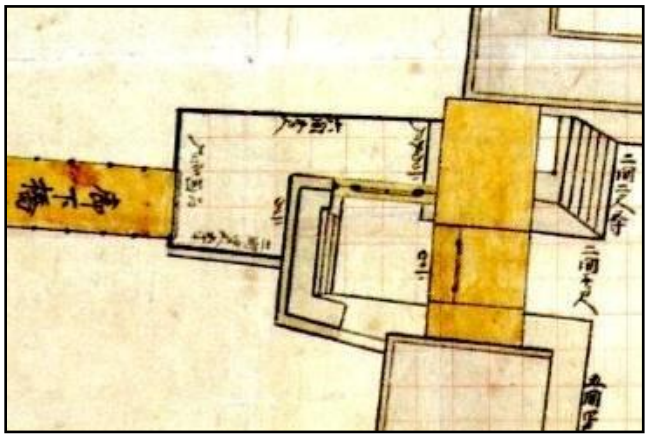

図３　「福井城本丸御建物図」『松平文庫』

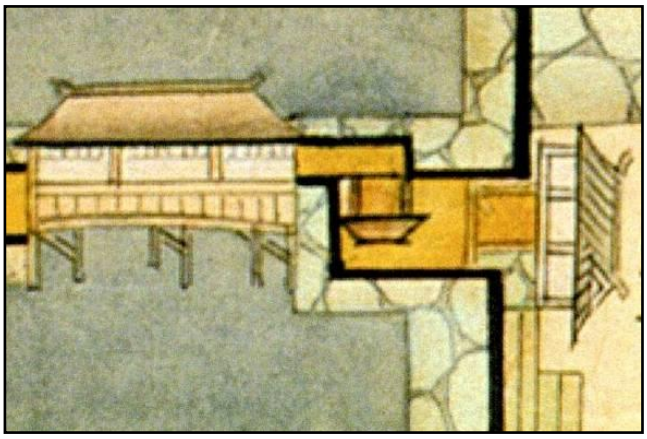

図４　「御城下之図」正徳４年（1714）

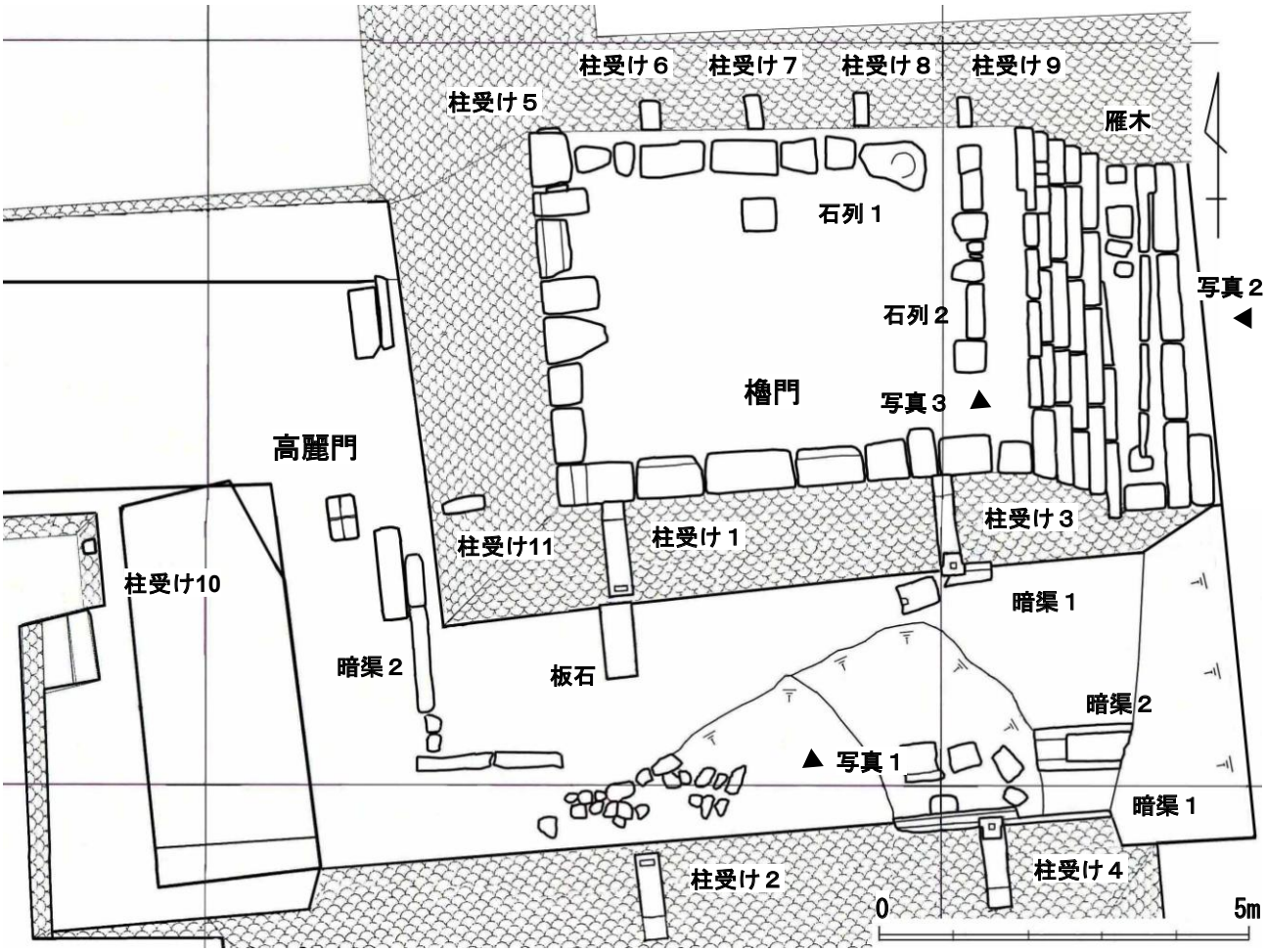

図５　調査区平面略図（縮尺1/100）

福井城跡山里口御門

写真１
櫓門北半（南より）

写真２
櫓門北半（東より）

写真３
石列２（南より）

【城門参考資料】

龍野城（埋門）

二条城（北中仕切門）